

留学を検討する前に

京都大学公共政策大学院教授

唐渡 晃弘

〈悔るべからず〉

政治史の専門家である私が、公共政策大学院の専任教員となつて一年近くになる。授業では、現代の政治問題を扱ってはいるものの、すわりの黒さをどこかに感じている。それは院生にとつても、同じなのかもしれない。目前の公的問題に第一の関心があり、それに対する政策形成を担う実務家を目指す公共政策大学院の院生にとつて、「歴史科目は不必要ではない」と思いつつも、時間的にも、そこまで関心が向かないのではないか、という印象が拭えない。まして対象が、日本のことであれば格別、ヨーロッパとなれば、なおさらなのかもしれない。こうしたことに配慮してくれたのか、何か外国のことについて書いて欲しいという依頼があった。そこで、留学について書いてみたい。ここ数年来、在学生であれ、卒業生であれ、留学について相談を受ける機会が重なったが、その都度、どう

にも釈然としな
い気持ちが残る
ことが多いから
だ。

少し前から、
日本人の留学生
数が減少してい
ることを嘆く声

が、マスコミで散見されるようになった。その理由が、甚で言われているように、内向き志向が強くなったとか、ハングリー精神が枯渇したということなら、それは確かに嘆かわしいことであろうが、ここでは、徒にそうした論調に棹をさすつもりはない。逆に、慎重を期してもらいたいという気持ちが強い。もちろん、長期の在外研究をした者として、その意義は十分に理解しているし、学生諸君にも挑戦して欲しいという気持ちも大いにある。それにもかかわらず、相談に対して、意図的に厳しい意見を伝えざるを得ないのは、留学について、その姿勢を疑わざるを得ないケースが多いからである。

とにかく(漫然と)外国に行き、勉強するとうことが自己目的化すべきではない。これは、指摘するまでもないことながら、実は隠れた理由になっている場合が多いのではないだろうか。教養課程の学生が、かなり曖昧な留学希望を述

べたなら、条件付きで賛成するだろう。しかし大学院の院生にとつては、そうした時期は過ぎ去ったと考えるべきだ。ましてや就職後に留学する場合など、もつと真剣に効果とリスクについて検討するべきだ。本人たちは、漫然とした気持ちではないと反論するであろうが、しっかりした成果を得るために必要な準備が、そして留学後の見通しについての検討が、十分に尽くされているとは思えないことが少なくない。

学部レベルであれ、大学院レベルであれ、外国語の講義を理解するには、相当な語学力が必要である。然るに、現時点での語学力は、いかにも常東ないレベルの場合が多い。厳しいようだが、「とにかく行つて、毎日接していれば、何とかかなります」などというのは、空想にすぎない。そもそも、現地で生活して、「何とかなつてくる」のは、日常生活レベルの言語習得である。それは明らかに、大学(院)の講義を理解し、レポートを作成する言語とは、異質なものである。そして、後者の言語は、実は日本で、かなりの程度、身につけることができる。

なにも、意地悪でやる気をなくさせよう、とするつもりもないし、徒にハードルをあげるつもりもない。しかし、もう少し現実を目を向け、地に足のついた準備をし、計画を立てて欲しいと願うまでである。

へ人の国際移動とマイノリティ

注意を喚起したうえで、ここからは、一九九〇年代初頭のパリでの個人的経験を記してみたい。当時は、ベルリンの壁が崩壊し、ソ連も解体・消滅したうえ、このたびの対イラク戦争とは異なり、多数の国の支持を集めた湾岸戦争が首尾よく終わった直後であり、まだテロの脅威も、ほとんどなく、国際社会は、まさに束の間の多幸感あふれる時代であった。

それでも社会は、今日につながる問題の多くをすでに胚胎していた。多くの異邦人が暮らす街でもあったから、外国人であることで、特に不都合や不愉快なことは、さほど無かった。しかし、定住者ではあるものの、あくまでマレビトであることを感覚的に認識させられるのが、滞在許可証の申請や更新のときである。多数のマグレブ出身者やアフリカ系の人たちに混じって申請をおこなう場所は、かなり異様な空間であり、愉快なものではない。当時でも、既に（不法）移民が社会問題になっていたから、「申請者＝怪しい者たち」という前提で、胡散臭そうな面持ちで対応されることになる。その後、流入人口がさらに増加するに伴って問題は深刻化し、滞在許可条件もより厳しくなっているようだが、その一端を、到着早々身を持って経験することになった。

へ社会階層と政治的立場

比例代表制の導入によって一九八六年には下院で躍進したものの、その後は再び小選挙区制に戻ったため低迷していた国民戦線のポスターを貼る若者たちは、一様に金髪でブレザーを着ており、大学ではめったに見かけない風貌の人たちであった。今では考えられないことだが、やや薄暗くなってから、数人で現れては、ポスターを貼ると、まるで逃げるかのように、慌ててその場から立ち去って行く姿は印象的であった。一九九三年にルイー・六世を追悼する二〇〇年点のセレモニーがコンコルド広場の一角で営まれたが、その宗教儀式を執り行ったのは、カトリックの中でも、第二次バチカン公会議の決定を認めない、アンテグリストと呼ばれる僧たちである。私も含めて物見高い野次馬に取り囲まれながら、儀式の内陣には、ポスター貼りをしていただけたのと同じでたちの若者が多数見て取れた。特定の政治的立場が、特定の社会階層と結びついていて、ひとつの例であった。

他方で、政治的立場は様々なが、それぞれがイメージとして拘くブルジョワとしての暮らしにこだわっている人も多かった。彼らは、自らが相応しいと考えるライフスタイルを頑固に維持しようとする。「有象無象の乗っている地下鉄には、一度も乗ったことが無い」と豪語する

人にも少なからず出会った。また、食事に招かれたとき、同じボトルを持参しても、ある家庭では、「このように上等なものは、私たちが口にするものではありません」と面と向かって言われ、非常に気まずい思いをしたが、他方で、「この程度のもものは、リキュールと混ぜないと飲めないよ」と言いながら、カシスと混ぜてしまったのにも、面食らったことがある。いずれの立場であれ、こうした人々にとっては、高級ブティックの袋を抱えて地下鉄に乗っているというのは、ありえない光景なのだ。

へ文化がそこにある暮らし

今でも強く印象に残っていることは、文化的な話題が、常に豊富だったことである。開催中の展覧会の印象を熱く語る人、あるいは、上演されているオペラの歌手や演出について、それぞれ一家言持った人が多かった。とあるバレエの演目について、「ポワントで踊るべきところが、ドウミ・ポワントになっていて、がっかりした」と言う批判を耳にしたときには、そこまでチェックしているのかと驚嘆させられたが、限定されたプロの批評家だけではなく、このような顧客がいるからこそ、高いレベルが維持されるのであると認識を新たにした一件であった。

さらに、日本では往々にしてサブカルとみな

される映画についても、ハイカルチャーの扱いを受けていたと思う。小津安二郎の全作品のみを、一ヶ月間ずっと上映していた映画館もあった、終わった後に、観客が映画について議論しながら帰っていったのには、驚いた。偶然にも、日本文化フリーグたちに出くわしたのかもしれないが、このような企画が興行的に成り立っていること自体、非常に示唆的であろう。

もちろん全ての人が、話題となった展覧会やオペラを観ていたわけではない。それでも、こうした話題に皆が興味を持っていたことは明らかであった。また、会話の中で、かなり特殊な解釈を開陳して、他の人から総攻撃を受けても、それはかまわない。テーマを共有できるということが重要なのであって、こうして文化は維持され受け継がれていくのである。

＜日本について語る＞

現地の政治・経済問題について、あるいは、ヨーロッパが発祥の文化について、話題を共有するにとどまらず、やはり日本について語ることに期待される場面も少なくない。公共政策を学ぶ者であれば、時事的な政治課題については、積極的に多様な話を展開できるであろうし、相手が日本やアジアについて一定の知識を持っているなら、かなり突っ込んだ議論ができよう。

しかし、日本の社会について聞きかじっているだけの多くの人たちに対して、どこまで説明するかは、かなり微妙な事柄である。特に、自分自身が必ずしも替同できない政策や、あるいは広く問題視されている社会現象について話題になった場合がそうである。というのも、相手の誤解や無理解を正そうと懸命に説明すればするほど、個人的には替同できない政策や社会現象を、肯定したり弁解したりする役割を演じる羽目になってしまう、という経験をしたことが少なからずあり、それは閉口したものである。

そうした場合にも有効であったのが、やはり文化について語ることであった。抹茶を点てて飲ませてみて、「ほうれん草のスープみたいだ」と反応してきたら、紅茶も緑茶も同じ茶葉からできているのだと、製法の違いを説明する。聞きかじりで誤解している人の中には、「これは、ゲイシャガールがやることか」と的外れなことを言う者もいるが、茶の湯の創成期は戦国時代であって、明日の命も知れぬ武将たちに好まれ、ほぼ男性に限定されていたことや、「一期一会」について説明すると、どこまで理解してもらえたのかはともかくとして、うなずいてもらえる。さらに、デモンストレーションを見て来て細かな質問をした人には、掛軸がその日の集まりのテーマであるとか、座る場所について注意を向

けてみる。少しでも東洋のことを知っていれば、古の大陸の思想に基づいて、都は、天子が南面するように造られていたことを指摘し、能舞台も北に面していること、茶室でも床の間は北側にしつらえられ、最も重要な客がその前に南を向いて座るのだと説明すれば、納得してもらえらる。こうして、茶の湯が思わぬ威力を発揮する機会が少なからずあった。

ベルリンの壁が崩壊したことも、ほとんど記憶に無い世代の諸君にとっては、結局ヨーロッパの「歴史」の話になってしまったが、留学を志す場合は、準備と検討を尽くした上で、それぞれの場所で、二一世紀初頭の物語を紡いでもらえばと思う。

唐渡 晃弘

からと てるひろ

1962 年大阪市生まれ。専門はヨーロッパ政治史。1986 年京都大学法学部卒業。同年京都大学法学部助手。同助教授を経て、2004 年法学研究科教授。2010 年同大学公共政策大学院教授。京都大学博士（法学）。1991 年から 1993 年にかけて、パリ第 4 大学において在外研究。主著『国民主権と民族自決－第一次大戦中の言説の変化とフランス』（木鐸社、2003 年）。